

N. F. S. グルントヴィの成人教育観

—デンマークの教育への影響を中心に—

高 須 奈 央

はじめに

本論の目的は、N. F. S. グルントヴィ（Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, 1783–1872）の思想から成人教育観を整理し、それがデンマークの教育にどのような影響を与えたかを考察することである。

筆者による本研究の出発点は、日本の教育や労働における現行制度の中では、近年広まりつつある個人の自由な選択によるライフスタイルの実現は難しいと考えたことにあった。実際、中央教育審議会答申（1981）で生涯教育の概念が定義されて以降、現在でも生涯学習社会の実現には課題が多い状況が続いている。また、経済審議会（1995～）では「高次な成熟経済社会に転換」することによる「個性的で自由な生き方」が提起され、「多様なライフスタイルの出現と終身就社の限界」（1999年報告）を指摘されているが、あくまで提言にとどまっている。その原因は、教育政策や労働政策のみでなく、日本人の学習観や労働観にもあるのではないだろうか。そこで、生涯学習が活発な国の一つとされるデンマークにおいて重要なグルントヴィの思想、そこから発展したデンマークの人々の価値観に示唆を得たいと考えている。

本論に関する基本文献には、グルントヴィ自身の諸論考がまとめられているグルントヴィ哲学・教育・学芸論集の4巻⁽¹⁾がある。また、グルントヴィの生涯とその思想についての先行研究は、ハル・コック、小池直人訳（2007）『グルントヴィ——デンマーク・ナショナリズムとその止揚』⁽²⁾、カイ・タニング、渡部光男訳（1987）『北方の思想家、グルントヴィ』⁽³⁾、ポール・ダム、小池直人訳（2014）『グルントヴィ小伝——時代と思想』⁽⁴⁾、清水満（1996）『生のための学校—デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界—』⁽⁵⁾、オヴェ・コースゴー、清水満訳（2016）『政治思想家としてのグルントヴィ』⁽⁶⁾、灰垣春奈（2012）「デンマーク近代国家の成立とグルントヴィの教育思想」⁽⁷⁾がある。さらに、児玉珠美（2016）「グルントヴィの教育理念の今日的意義」⁽⁸⁾は、グルントヴィの教育思想の一つである「生きた言葉と相互作用」について今日的意義を見出している。

グルントヴィとデンマークの成人教育、フォルケホイスコーレに関する先行研究は、ステイーヴン・ポーリシュ、福井信子訳（2011）『生者の国——デンマークに学ぶ全員参加の社会』⁽⁹⁾、オヴェ・コースゴー、高倉尚子訳（1999）『光を求めて—デンマークの成人教育500年の歴史—』⁽¹⁰⁾、佐々木正治（1999）『デンマーク国民大学成立史の研究』⁽¹¹⁾がある。佐々木の研究的蓄積をふまえて、石川拓（2015）「グルントヴィの教育思想とフォルケホイスコーレに関する考察—佐々木正治による先行

研究に注目して—」⁽¹²⁾は、グルントヴィの教育思想とフォルケホイスコーレの関係を検討している。また、藤村好美（1997）「マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成過程——ハイランダー・フォークスクールの設立とグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想——」⁽¹³⁾は、グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想がホートンの成人教育理念に与えた影響を追究している。成人教育制度の一つである自由成人教育の体系的な研究としては、佐藤裕紀（2012）「デンマークの生涯学習戦略に関する一考察—『デンマークの生涯学習戦略』における自由成人教育の戦略に着目して—」⁽¹⁴⁾、佐藤裕紀（2013）「デンマークにおける成人教育者の質の保障と訓練—自由成人教育における成人教育者の採用と訓練に焦点をあてて—」⁽¹⁵⁾がある。2007年にデンマーク政府が示した『デンマークの生涯学習戦略—万人のための教育と生涯スキルのアップグレード（*Denmark's strategy for lifelong learning – Education and lifelong skills upgrading for all*）』を考察したうえで、生涯学習の評価、認証の観点から自由成人教育を研究したものである。

このように、グルントヴィ自身の著作、グルントヴィの生涯と思想、デンマークの成人教育制度、とりわけフォルケホイスコーレについては一定の蓄積があるが、グルントヴィの成人教育観に焦点を当てて、現代デンマークの生涯学習に対する具体的な貢献を考察することには、研究の余地があると考えている。そこで本論では、1. N. F. S. グルントヴィの生涯と思想—その成人教育観を中心に—、2. 現代デンマークの教育にみられるグルントヴィの成人教育観の順で考察していきたい。

1. N. F. S. グルントヴィの生涯と思想—その成人教育観を中心に—

グルントヴィは、聖職者、詩人、政治家、教育思想家などの分野で幅広く活躍し、近現代のデンマーク社会を考えるときには欠かすことができない人物である。主に「民主主義」や「社会への能動的な参加」、「生涯にわたる学習」といったデンマークの教育における価値観に強く影響を残した。一方で、膨大な著作を残しながらもその一部しか知られず、著述の大部分が詩的・直観的で独特な文体であること、思想や主張の転換が繰り返されること、彼の思想を形作る北欧神話やキリスト教といった文化的背景への馴染みの薄さなど、いくつかの理由から全貌が明確にはなっていないことをコック（2007）の訳者小池も指摘する⁽¹⁶⁾。日本では大正期に「農民文化の父」と呼ばれ、松前重義による東海大学の建学理念に影響を与えたことが知られている⁽¹⁷⁾。グルントヴィは、ヨーロッパ各地で市民革命が活発化し、民主主義社会への移行が進もうとする渦中で、農民を含む市民の社会への能動的な関わりへの必要性を主張した。それは、社会参加という点で成人教育、生涯学習への連続を想起させるものである。

グルントヴィの教育思想には、「生きた言葉（det levende ord）」、「相互作用（vekselvirkning）」としての「対話」、「民衆の啓蒙（folkeoplysning / folkelig oplysning）」と表現できる主な概念があり、後に「生の学校」として実現するフォルケホイスコーレがその実践の場となっている。以下では、1-1で彼の生涯とその成人教育観の形成をたどり、1-2でフォルケホイスコーレ構想の実現について整理したい。

1-1 グルントヴィの生涯と成人教育観の形成

グルントヴィは、1783年9月8日にシェラン島の南にあるウズビュ（Udby）という町に、牧師の父ヨハン・グルントヴィの4人兄弟の末っ子として生まれ、牧師館で育った⁽¹⁸⁾。父ヨハンがルター派敬虔主義の立場をとっていた影響で、少年時代は保守的で敬虔主義的な信仰に感化されていた⁽¹⁹⁾。1792年、9歳でユラン半島のチェルゴーの牧師館に住み込み、以前グルントヴィ家の家庭教師だったフェルド牧師からラテン語の初歩的な教授を受け、ラテン語学校（グラマースクール）に入る準備を始めた。1798年、オーフスにあるラテン語学校に入学したが、そこで過ごした2年間に後に「自然で生きいきしたものすべてに全く無縁で、品位を高めるものすべてが欠落しており、他方で人を墮落させ、鈍重にし、腐らせるものは満ち溢れていた」⁽²⁰⁾、「死せる時期」⁽²¹⁾と表現している。このように、自身の子ども時代の経験からラテン語や伝統的な学校教育には否定的な感情を持っていたことがわかる。また、一般庶民との交流が深い牧師館という家庭環境にあり、特に父の牧師館で出会った南シェランの方言を話す老女の姿は、グルントヴィにとって民衆的な表現の模範となった⁽²²⁾。

1800年、コペンハーゲン大学神学部に入學し、純文学、歴史、北欧神話について探究した。グルントヴィは青年時代にロマン主義に傾倒していったといわれるが、思想の転換に大きく影響することになったのが哲学者ヘンリク・シュテフェンス（Henrik Steffens, 1773-1845）による1802年から1803年の連続講義である。シュテフェンスは、グルントヴィの母の妹の子であり、ノルウェーで生まれた。ドイツのイェナ大学で哲学者シェリングに師事し、デンマークの思想界にロマン主義哲学をもたらした人物である。グルントヴィはこのロマン主義運動のことを「ドイツ的反乱」⁽²³⁾と呼び、多数の若い作家や思想家たちと共に新しい思想に感化された。シェイクスピアやゲーテ、セルヴァンテスなどのヨーロッパ文学に傾倒したのも、シュテフェンスの影響といわれる⁽²⁴⁾。同時に1803年、20歳のときに神学試験に合格し、コペンハーゲン大学神学部を最高位で卒業した。学位を取得した後しばらくは文筆活動をてがけていたが、1805年3月にランゲラン島のエーリュッケ（Egeløkke）の荘園で7歳の少年カールの家庭教師として職に就いた。3年間の滞在期間に少年の母であるコンスタンス・スティーンセン＝リト（Constance Steensen Leth）に恋心を抱いたが、既婚者に対する許されない感情であったために研究と文学的創作に戻ることを決め、ロマン主義的人生観が深まっていった⁽²⁵⁾。

1810年、当時76歳の父親に故郷ウズビュに戻って牧師補になるように懇願され、悩んだ末に執筆活動や学問を中断することを決めて牧師の説教試験を受けた。同年3月の説教試験では、文献や知識に頼った合理主義的な大学神学を批判するタイトル「なぜ主のことばは彼の家（教会）から消えてしまったのか？（Hvi er Herrens Ord forsvundet fra hans hus?）」を自らの説教に付して物議をかもした。この時期のトラブルが一因となり躁うつ病的な傾向を発症したといわれている。また、1813年に父ヨハンが亡くなくてもその地位を引き継ぐことは叶わず、コペンハーゲンに戻って学問と執筆活動を再開した。ときどきは説教をして生計をたてていたが、グルントヴィの激しい性格が聖職者たちに受け入れられず、聖職が空いても牧師に戻ることは難しかった⁽²⁶⁾。この時期には、記録文書

や歴史資料、歴史解説、諸論考などを掲載する雑誌の出版、讃美歌やその他の翻訳を手がけ、1818年から1821年には、スノッリ（Snorre, 1178-1241）の『国王たちの伝説（Snorres Norges Konge-Kronike）』、サクソー・グラマチクス（Saxo, c.1150-1220）の『デンマーク年代記（Saxos Denmark's Kronike）』、7世紀のイングランドで編まれた英雄詩『ベオーウルフ』の3作をそれぞれ古代北欧語、中世ラテン語、アングロ・サクソン語から翻訳した。ここでグルントヴィは、一般民衆にも読めるような素朴なデンマーク語を用いている。このような行動に王国の国庫から支出される奨学資金と私的な資金援助を受けることへの批判があがった点は、当時のラテン語優位の考え方を想起させるが、結果としてスノッリとサクソーの翻訳書は人気の読み物となった⁽²⁷⁾。

その後、聖職者たちによるグルントヴィ批判は継続したが、一部の王族や高位の人々の間で彼を援助しようという機運もあり、南シェランの故郷に近く、父の死後に母が住んでいたプレストという町で、1821年に牧師に任命された。しかし、首都コペンハーゲンの方が執筆活動を継続する環境が整っていたため、母の死後1822年にはコペンハーゲンに移り、クリスチャンハウンド救世主教会（Vor Frelzers Kirke）の牧師補として4年間、作家兼聖職者として過ごした⁽²⁸⁾。この時期には、キリスト教の基礎は書物すなわち聖書そのものにあるのではなく、教会に集う信者の言葉に真理があり、信仰は人の言葉によって移転されるという新しい教会観に到達している。この教会観について灰垣（2012）は、「信仰、または神とは、日々の生活の出来事との関係をなくしてはあり得ず、それらは、日々の生の中で再編成されると主張している」、「ゆえに、信仰とは（中略）母語ですべての人に語りかける中にあると考えていた」と述べ、母語の讃美歌は信者自身が信仰に参加する経験だと説明している⁽²⁹⁾。この思想は、1825年に『教会の応酬（Kirkens Genmæle）』の発表によって明らかにされた。これは神学教授 H. N. クラウセン（H. N. Clausen）に宛てて議論を持ち掛けたものだったが、クラウセンはグルントヴィの批判的な表現を侮辱ととらえ、名誉毀損の裁判となった。グルントヴィはこれに敗訴し、生涯にわたり彼の著作は警察による検閲の対象となることが決まり、実際に1837年まで検閲下に置かれていた。この一件で強く批判を受けたことと合わせて、キリスト教伝来1000年を記念する特別礼拝が予定されていた1826年の聖霊降臨祭で自身の書いた讃美歌の使用が認められなかったことも影響して、グルントヴィは判決が出る前に聖職を辞することを決めた⁽³⁰⁾。このように、聖職者や作家としての経験の中で「生きた言葉」、すなわち民衆の日常言語であるデンマーク語への価値を見出していったことがわかる。

その後は、研究に専念する生活を送り、1828年にはアングロ・サクソンの研究のために英国渡航を希望し、奨学金に応募した。その結果、国王から資金を得ることとなり、1829年、1830年、1831年に3か月ずつイングランドに滞在した。このイギリス留学で産業革命や資本主義の根底にある英国社会の自由や市民生活に触れたことは、独自の宗教観を深めるだけでなく、その後の著作や政治活動にも大きな影響を与えた⁽³¹⁾。とくにケンブリッジ大学のトリニティー・カレッジでの体験は、後のフォルケホイスコーレ（Folkehøjskole）創設の構想にもつながったといわれる。そこには、教師と学生の間で自由な討議が行われる共同生活があり、互いに敬意が払われる関係で対話による相互作用

を通じた人間形成が実現されていた。当時のデンマークは暗記や実学主義、競争が主な教育であったが、産業革命の進むイギリスとは対照的な農村地帯で、国民の大部分を占める農民たちは貧しく学校に行く時間もなかった。このようにイギリス社会を目の当たりにしたことで、「生きた言葉」による「対話」、「相互作用」へのこだわりが深まったといわれる⁽³²⁾。

一方で、1814年の庶民学校令（義務教育の開始）論議への参加、1849年の自由主義憲法制定に尽力するなど政治家としても活躍し、聖職者としてはデンマークにおけるキリスト教や教会の歴史を語るうえで欠かせない数々の功績を残して1861年には監督の名誉称号を受け、1872年9月2日にこの世を去った。

以上、グルントヴィの生涯を跡づけながら、彼にとっての「生きた言葉」と「対話」、「相互作用」の重要性を確認した。これらは、グルントヴィの成人教育観を支える不可欠な要素となったのである。次に、その実践の場となったフォルケホイスコーレについて検討したい。

1-2 フォルケホイスコーレ構想の実現

フォルケホイスコーレは、「国民高等学校」「成人学校」「国民大学」等と訳され、「生きた言葉に基づいた生の学校」というグルントヴィの構想が基となって、1844年11月7日、ユラン半島南部のロディン（Rødning）に初めて創設された⁽³³⁾。この地に開校された理由には、現在のドイツとの国境を繰り返し争ってきた歴史的背景が指摘される。スレースヴィ地方はデンマーク語を公用語とする住民が多かったにも関わらず一時ドイツ領になるなど、帰属が揺れ続けてきた地域である。1864年のプロイセン戦争の敗戦によりスレースヴィを含む南ユランを奪われた後にフォルケホイスコーレ運動が活発化して各地に普及していったのも「生きた言葉」に対する圧力を受けた苦難と関係している⁽³⁴⁾。

グルントヴィがフォルケホイスコーレの構想に着手したのは、イギリス留学後の1830年代だった。自身の少年時代の学校教育から始まり家庭教師経験などを通して、少数のエリートに向けた外国の「死せる言語」に比重を置く既存の教育制度への疑いが深まっていたことから、精神の創造的な時期である青年期に教育を行うことに大きな意義を感じていた⁽³⁵⁾。対象を青年としたことについて佐々木（1999）は、グルントヴィの早教育に対する否定的な立場を指摘する。心身ともに成熟した青年期は、実生活の中で疑問を持ち、自ら学習意欲が湧き出る時期であり、知識習得に最適だという考えがあった⁽³⁶⁾。フォルケホイスコーレは、数か月間の共同生活をしながら対話を通して学ぶ場であり、資格や地位を与えるような試験は一切実施しない。一般民衆を含むすべての若者を対象として「国中から集まった若者たちの相互作用をできるだけ多くいきいきとするよう努力するところ」⁽³⁷⁾と構想された。階級や経験に対立やギャップがある世界を生きた言葉で媒介し相互作用を及ぼしあうことで、将来の官僚と民衆が双方から働きあう生きた共同体の実現を描いたが、当時の人口の圧倒的多数を占めていたのが農民だったため、現実には学校に行く時間がない農村の若者が生徒の中心となった。自営農民の息子が農閑期に開かれた学校で農業技術や経済など役立つ知識とともに社会生活に参加するための教養を学び、教育を受けた後には地域社会の中心となって協同組合などの団体を組織した。初

期のホイスコーレ運動の中にはグルントヴィの思想に必ずしも共感しない教育者も存在し、その発展は複雑な一面を持つが、デンマークの農村文化を改革し、自立した農民という新たな階級を作り出すことに大きく貢献したことは明らかである⁽³⁸⁾。

以上より、グルントヴィの生涯と経験から導き出される主要な教育観を改めて整理すると、次のように言えるだろう。

第一に、19世紀初頭、当時の知識人がラテン語やドイツ語、フランス語を使い、民衆が参加する宗教や教育においてもラテン語優位だった時代に、民衆の話すデンマーク語こそ「生きた言葉」として価値があるとした。また、グルントヴィは民衆が理解できるデンマーク語の詩や賛美歌も多数残している。これは、民衆の日常生活に即した教育の出発点を意味するものであった。

第二に、教師が一方的に生徒に知識を流し込む教育に反対し、対等の立場で自由に話し合い、相互に影響を与えながら学ぶこと、すなわち教育における「対話」と「相互作用」を重視した。全ての人が平等に権利を持つことを認識し、社会における権力の不均衡の平和的な解決が教育の場で試みられた。それは、教育が他律的なものではなく、民衆相互の自発的な営為であることを意味する。そして19世紀半ば以降、フォルケホイスコーレが各地に設立されたことで成人にも相互に学び合う教育機会が提供され、社会の担い手となる市民が育っていった。

2. 現代デンマークの教育にみられるグルントヴィの成人教育観

1では、グルントヴィの成人教育観の中核に「生きた言葉」と「対話」、「相互作用」の思想があることを指摘したが、グルントヴィの成人教育観が現在のデンマークの生涯学習および成人教育にどのように反映されているかを確認したい。以下、教育の場における平等意識、成人教育を通じた能動的な社会参加、生涯学習を支える民主主義観の3点から検討する。

2-1 教育の場における平等意識

グルントヴィの思想である「対話」ならびに「相互作用」は、学校を含むあらゆる教育の場（空間）における対等な関係性を意味している。教える側と教えられる側が対等であることから、大人から子どもへの一方的な従来の教育の概念にとらわれない。また、国家が教育内容を規定することについても問題視した。

グルントヴィは19世紀の庶民学校について、農民は読み書き、計算を習う学校に子どもを通わせることの理由を理解できず、負担に感じていることを指摘する⁽³⁹⁾。「なによりまず庶民が学校について良好なイメージをもつこと、庶民が学校に尊敬と愛着をもち、よい観念を得ること」⁽⁴⁰⁾が重要であるとし、一定のことがらを学ぶよりも庶民の生活や職業に即して「親たちが確信すること、聞きたいと思うことを子どもに話す」⁽⁴¹⁾学校の在り方を示した。この思想は、現在の私立学校に結びついている。デンマークの私立学校の伝統は、グルントヴィとフォルケホイスコーレの普及に尽力したクリステン・コル（1816-1870）の思想に起源があり、それぞれの宗教、政治・社会思想、民族的な背景が

尊重される。ドイツ系民族学校を始め、イスラム系、カトリック系、シュタイナー系など、どのような教育理念を掲げる学校でも、基準を満たせば政府から認可され、補助金の支給を受けることができる。また、義務教育は教育を受ける義務であり、学校に出席する義務ではないと憲法に規定される通り、私立学校は、公立学校、ホームスクーリングと並んで親が選択できる義務教育の一つと位置付けられている⁽⁴²⁾。権力から教育を与えられるのではなく対等な関係性を重視するグルントヴィの思想は、自分たちの意思で学びの場を創出するという現在の生涯学習文化に引き継がれていると言えるだろう。

2-2 成人教育を通じた能動的な社会参加

現在、デンマークの成人教育制度は、その目的によって「職業訓練成人教育」「普通成人教育」「自由成人教育」と3種類に分類される⁽⁴³⁾。職業訓練成人教育は、低技能とされる人や職業資格の取得・更新を希望する人などのスキルアップが目的である。デンマークに居住する人またはデンマークで働く人すべてを対象に、労働市場の需要に応じて幅広い職業に関連するプログラムが用意されている。失業者や移民、難民も対象であり、通常教育に馴染めない人が教育や職業のラインにのるための援助にもなっている⁽⁴⁴⁾。普通成人教育では、基本的な知識や技能を習得・向上できる機会を提供し、学習者の職業や教育における可能性を広げることを目的とする。学習障害を持つ人やデンマーク語を母語としない人、その他理由は問わず義務教育を修了していない人、もう一度受け直す必要がある人等を対象とし、基礎的な読み書き、計算を含む義務教育または後期中等教育レベルの教育を受けられ、修了の認定を得ることができる⁽⁴⁵⁾。

職業訓練成人教育や普通成人教育は、1930年代以降の時代背景により整備され、近年も改革されながら運用されているが、デンマークの成人教育制度の起源とされるのは、自由成人教育である。原則として、修了資格が認定されるプログラムではなく、年齢以外の特別な入学資格もない。カリキュラムが国や自治体に規定されず、教育内容は運営者の思想や学習者のニーズが尊重される点で、グルントヴィの思想を直接的に受け継いでいる。代表的な教育機関は前述したフォルケホイスコーレであるが、NGOなどの民間主導の学習活動やボランティア活動、大学の公開講座もここに分類される⁽⁴⁶⁾。フォルケホイスコーレは時代とともに多様化し、現在では一般的な教養に加え、スポーツやゲーム開発、ロボット工学などのプログラムもあり⁽⁴⁷⁾、デンマーク国内74校であわせて年間約45,000人が短期コース、約8,000人が長期コースに参加している⁽⁴⁸⁾。

デンマークの教育をめぐる状況は、経済や国際的な側面によって変化している。2007年にデンマーク政府が示した生涯学習戦略は、知識基盤型社会で世界経済を牽引することを目指すEUの施策を強く反映するものとなった。学力向上や労働者のスキルアップ、職業資格の取得を中心とする方針に転換され、成人教育においても労働市場に近い教育に比重が置かれている。一方で、自由成人教育は民主主義の発展や社会的結束、学習文化の創造に貢献しているという一定の評価があり、フォーマルな教育や就業への足がかりとしての役割を果たしている⁽⁴⁹⁾。生涯学習戦略には、全ての人の生涯学

習への参加が目標の一つとして掲げられるが、低学歴や低スキル、移民、外国人、障がい者など、社会の周縁に置かれやすい人々を対象としたプログラムが具体的に用意されることは、成人教育が社会参加の機会となり、市民概念を拡大する役割を果たすというグルントヴィの教育的理想を見出せるだろう。

2-3 生涯学習を支える民主主義観

最後に、現在のデンマーク社会でもっとも重要といえる価値観、民主主義とグルントヴィの思想との関係性について検討する。高等教育科学省が掲げる「デンマークの教育における原則」には、万人のための教育（Education for all）、高水準（High standards）、生涯学習（Lifelong learning）、能動的参加（Active participation）、プロジェクトワーク（Project work）の5つが掲げられているが、ここでは生涯学習の項目に書かれた内容を以下に引用したい⁽⁵⁰⁾。

生涯学習はデンマークにおける重要な原則である。その考え方は、19世紀の牧師であり哲学者であったN. F. S. グルントヴィにさかのぼる。彼は、民主社会に能動的に参加するための前提はすべての市民が生涯を通して教育を受けることだと主張した。（筆者訳）

生涯学習を「民主社会に能動的に参加するための前提」と位置づけ、その思想はグルントヴィに基づくことが記されている。デンマークにおける民主主義の重要性は、国民学校法（Folkeskoleloven）からも知ることができる。同法第一条には、国民学校は保護者と協力して、デンマークの文化や歴史、他国の文化、自然と人間の相互作用といった生徒の全人的な発達を促す知識や技能を提供することが定められる。また、生徒の気付き、創造力、自信を育成するため、経験や実践活動が重視されると同時に、「国民学校は生徒に自由と民主主義の社会への参加、連帯責任ならびに権利と義務を教える」「学校でおこなわれることは、自由と平等、民主主義の精神によって特徴づけられなければならない」と規定される⁽⁵¹⁾。このようにデンマーク社会では、民主主義の価値観が大切にされ、学校教育でその価値観を育成し、成人教育は市民が社会に参加する手段の一つとして位置づけられている。

しかしながら、グルントヴィは長らく絶対君主制の支持者であり、民主主義社会への移行に必ずしも積極的な態度をとっていたわけではないことを補足したい。ただ一貫して国民の声が聴かれることを重視し、君主の統治であっても議会の決定であっても、権力によるあらゆる強制には反対していた。グルントヴィがフォルケホイスコーレを展開した理由には、絶対王政の崩壊と民主主義への移行といった時代背景に伴い、国民が自由意思によって声を発するための啓蒙が必要だったこと、すなわち住民が国民になるための啓蒙を必要としたことが指摘されている⁽⁵²⁾。こうしたグルントヴィの成人教育観は、個人の自由意思が社会の発展を担うという民主主義観を持つ国民性を育て、現代の生涯学習文化の創出に寄与していると言えるだろう。

おわりに

本論の目的は、N. F. S. グルントヴィの成人教育観を、デンマークの教育、さらに生涯学習への影響という観点から検討することにあった。

グルントヴィの成人教育観の特徴を要約すれば、民衆の日常言語であるデンマーク語を重視し、一般の民衆がそれぞれ個人として社会に主体的に参加する重要性を主張したこと、また、民衆による民衆のための教育を提起した点にある。さらに教師が子どもに一方的に知識を流し込む従来の教育に反対し、青年が対等の立場で自由に話し合い、相互に影響を与えながら学ぶことを提唱した。それは、民衆の「対話」と「相互作用」の重視であり、成人教育の方法的基礎になったと捉えられる。以上のグルントヴィの教育観は、デンマークの教育制度全般に反映され、対等な対話で物事を解決する教育を通じて、国民に民主主義の精神を浸透させたといえる。

デンマークでは民主主義の価値観を基礎として、教育の場に限らず、自己決定が尊重され、連帯意識を養う活動が進められている。このような人々の価値観は、生涯学習社会の実現に対して日本が抱える課題の解決に示唆を与えると考える。稿を改めて、継続して検討していきたい。

- 注(1) N. F. S. グルントヴィ、小池直人訳 (2010) 『世界における人間 [グルントヴィ哲学・教育・学芸論集 1]』, 風媒社。N. F. S. グルントヴィ、小池直人訳 (2011) 『生の啓蒙 [グルントヴィ哲学・教育・学芸論集 2]』, 風媒社。N. F. S. グルントヴィ、小池直人訳 (2014) 『ホイスコーレ上 [グルントヴィ哲学・教育・学芸論集 3]』, 風媒社。N. F. S. グルントヴィ、小池直人訳 (2015) 『ホイスコーレ下 [グルントヴィ哲学・教育・学芸論集 3]』, 風媒社
- (2) ハル・コック、小池直人訳 (2007) 『グルントヴィ——デンマーク・ナショナリズムとその止揚』, 風媒社。Hal Koch (1959) *N. F. S. Grundtvig*, 2. udgave, Gyldendal.
- (3) カイ・タニング、渡部光男訳 (1987) 『北方の思想家、グルントヴィ』, 杉山書店。Kaj Thaning (1972) *N. F. S. GRUNDTVIG* (English translation by David Hohnen), The Danish Cultural Institute.
- (4) ポール・ダム、小池直人訳 (2014) 『グルントヴィ小伝——時代と思想』, FSCN discussion paper (社会文化形成ディスカッションペーパー) No. 14-1, 2014 年 4 月 8 日発行, 名古屋大学社会文化形成研究会。Poul Dam (1983) *N. F. S. Grundtvig* (English translation by Reginald Spink), the Royal Danish Ministry of Foreign Affairs, Aros Forlag.
- (5) 清水満 (1996) 『生のための学校—デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界—』, 新評論
- (6) オヴェ・コースゴー、清水満訳 (2016) 『政治思想家としてのグルントヴィ』, 新評論。Ove Korsgaard (2014) *N. F. S. Grundtvig: as a Political Thinker*, DJØF Publishing.
- (7) 灰垣春奈 (2012) 「デンマーク近代国家の成立とグルントヴィの教育思想」『創価大学大学院紀要』第 34 号, pp. 243-261.
- (8) 児玉珠美 (2016) 「グルントヴィの教育理念の今日的意義」『名古屋女子大学紀要。家政・自然編, 人文・社会編』62 号, pp. 195-203.
- (9) スティーヴン・ボーリシュ、福井信子訳 (2011) 『生者の国——デンマークに学ぶ全員参加の社会』, 新評論。Steven M. Borish (1991) *The Land of the Living: The Danish Folk High Schools and Denmark's Non-Violent Path to Modernization*, Blue Dolphin Publishing.

- (10) オヴェ・コースゴー, 高倉尚子訳 (1999) 『光を求めて—デンマークの成人教育 500 年の歴史—』, 東海大学出版会. Ove Korsgaard (1997) *Kampen Om Lyset: Dansk Voksenoplysning Gennem 500 år*, Gyldendal.
- (11) 佐々木正治 (1999) 『デンマーク国民大学成立史の研究』, 風間書房
- (12) 石川拓 (2015) 「グルントヴィの教育思想とフォルケホイスコーレに関する考察—佐々木正治による先行研究に注目して—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』第 58 号, pp. 35-44.
- (13) 藤村好美 (1997) 「マイルズ・ホートンの成人教育理念の形成過程——ハイランダー・フォークスクールの設立とグルントヴィのフォルケホイスコーレ構想——」『生涯学習・社会教育学研究』第 21 号, 東京大学大学院, pp. 35-45.
- (14) 佐藤裕紀 (2012) 「デンマークの生涯学習戦略に関する一考察—『デンマークの生涯学習戦略』における自由成人教育の戦略に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 19 号-2, pp. 107-117.
- (15) 佐藤裕紀 (2013) 「デンマークにおける成人教育者の質の保障と訓練—自由成人教育における成人教育者の採用と訓練に焦点をあてて—」『日本生涯教育学会年報』第 34 号, pp. 223-242.
- (16) コック (2007) 前掲, pp. 259-272
- (17) 小池直人 (2005) 『デンマークを探る 改訂版』風媒社, p. 199. 東海大学「松前重義と建学の精神」
<https://www.u-tokai.ac.jp/about/profile/spirit/spirit/> (2019/08/03)
- (18) ダム (2014) 前掲, p. 7
- (19) タニング (1987) 前掲, pp. 22-27
- (20) ダム (2014) 前掲, p. 8
- (21) タニング (1987) 前掲, p. 27
- (22) ダム (2014) 前掲, p. 7
- (23) タニング (1987) 前掲, p. 29
- (24) ダム (2014) 前掲, pp. 8-9, 46
- (25) 同上, pp. 9-10
- (26) 同上, pp. 11-12
- (27) 同上, pp. 12-13, 45
- (28) 同上, pp. 13-14
- (29) 灰垣 (2012) 前掲, pp. 250-251
- (30) ダム (2014) 前掲, pp. 14-15
- (31) 同上, pp. 15-16
- (32) 小池 (2005) 前掲, pp. 204-205
- (33) ボーリシュ (2011) 前掲, p. 211
- (34) 灰垣 (2012) 前掲, pp. 248, 257-258
- (35) ダム (2014) 前掲, pp. 18-19
- (36) 佐々木 (1999) 前掲, pp. 208-211
- (37) 清水 (1996) 前掲, p. 104
- (38) ボーリシュ (2011) 前掲, pp. 211-216, 239-246
- (39) グルトンヴィ (2011) 前掲, pp. 88-90
- (40) 同上, p. 95
- (41) 同上, p. 96
- (42) Ministry of Children and Education. Apr. 29, 2019. Private Schools in Denmark. <https://eng.uvm.dk/primary-and-lower-secondary-education/private-schools-in-denmark/about-private-schools-in-denmark> (2020/03/25)
- (43) 本論では佐藤 (2012) の訳を用いる。
- (44) Ministry of Children and Education. Jun. 8, 2018. Adult vocational training. <http://eng.uvm.dk/adult-education-and-continuing-training/adult-vocational-training> (2020/04/04)

-
- (45) Ministry of Children and Education. Apr. 23, 2019. The General Adult Education Programme. <https://eng.uvm.dk/adult-education-and-continuing-training/the-general-adult-education-programme> (2020/04/04)
 - (46) Ministry of Children and Education. Feb. 27, 2018. Non-formal adult education. <https://eng.uvm.dk/adult-education-and-continuing-training/non-formal-adult-education> (2020/04/04)
 - (47) Association of Folk High Schools in Denmark. <http://www.danishfolkhighschools.com> (2020/05/24)
 - (48) Ministry of Children and Education. Feb. 27, 2018. Non-formal adult education. 前掲 (2020/04/04)
 - (49) 佐藤 (2012) 前掲, pp. 107–117
 - (50) Ministry of Higher Education and Science. Sep. 11, 2018. Principles for education in Denmark. <http://ufm.dk/en/education-and-institutions/the-danish-education-system/principles-for-education-in-denmark> (2020/03/16)
 - (51) Retsinformation. Folkeskoleloven. LBK nr 823 af 15/08/2019. <https://www.retsinformation.dk/eli/lta/2019/823> (2020/05/21)
 - (52) オヴェ (1999) 前掲, pp. 146–149